

# 表紙 の 説明

## 名古屋城 (天下普請による巨大な城と天守)について



ヘリコプター搭載型航空レーザ計測&マルチカメラシステム「SAKURA」により名古屋城を計測しています。連結式層塔型(大天守五層五階、小天守二層二階)の形状や、大天守の屋根の上に載せられた金鯱(金のしゃちほこ)が見てとれます。また南側に現在本丸御殿の再建工事が実施されています。表紙上段(左・右)、表紙下段(左・右)は、それぞれ写真画像・色付き点群・反射強度・標高段彩を表示します。

### ■表紙画像のご提供先

#### 「名古屋城」

中日本航空株式会社東京支社調測営業

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-5 京橋スクエアビル7F  
http://www.nnk.co.jp Tel : 03-3567-6221

名古屋城は、名古屋市の中央部に位置する台地上に築かれた平城です。江戸城・大坂城とともに日本三大名城の一つと称されています。御三家筆頭の尾張徳川家62万石の居城です。

名古屋城の歴史は、戦国時代に駿河国の今川氏が築城し、今川氏豊を城主に据えたことから始まります。その後、織田信長の父、信秀が今川氏を追い出し、まだ幼かった信長を城主にしました。当時は那古野城と呼ばれていました。信長は弘治元(1555)年に清須(洲)城に移るまで那古野城を居城にしました。

慶長14(1609)年に徳川家康が那古野城跡を拡大しての築城を命じました。翌年、加藤清正をはじめとする西国諸大名20家が天下普請を手伝いました(図-1~2)。そして、元和元(1615)年に家康の第9子義直が本丸に入城し、その翌年には二の丸御殿が完成しました。

名古屋城は金の鯱鉾で有名ですが、雄雌一対の鯱鉾には慶長大判1940枚が使われたと伝えられています。加えて、名古屋城の最大の特徴は巨大な天守にあると言えます。慶長15(1610)年8月に天守台の石垣が築かれると、外観五層で内部が地上五階、地下一階の大天守構築が始まり、慶長17(1612)年末に完成しました。大天守は、その南側に位置する小天守(二層二階地下一階)とそれぞれの地階を橋台で結ぶ連結式天守の形式と

なっています(図-3)。大天守は、一階と二階が同じ大きさで、南北37m、東西33mあり、現存する最大の天守である姫路城の大天守の規模に比べて、実に二倍を超える面積になっています。

また、他の多くの天守には矢狭間や鉄砲狭間、石落としなどの防御施設がありますが、名古屋城天守には狭間が一つも見られず、石落としも天守入口の真上に一つあるのみです。このように武装を外に見せていないのも名古屋城天守の特徴の一つで、気品のある外観に拘っているようです。その一方で、外壁は45cmの厚さの土壁であり、その中に12cmの厚さのケヤキ板を鎧状に設け、当時の砲弾が当たっても跳返す構造となっています。

この大天守には軒先から大きな銅製の樋で雨水を導き、天守台石垣面を伝わって内堀の底まで雨水を流し込んでいました。そのため復興天守にも当時同様の銅製の樋を施工しています。

名古屋城天守は、明治の廃城令にもその威容を残し、明治24(1891)年の濃尾大地震にも耐えてきましたが、終戦直前の昭和20(1945)年5月の空襲で大天守、小天守、本丸御殿などの貴重な建物を失いました。昭和34(1959)年に外観を当時の天守に模した復興天守が建てられ、現在、本丸御殿の復元工事が進められています。

(瀬戸島政博)



図-1 加藤清正の石曳き像(筆者撮影)



図-2 清正石と伝えられる巨石(筆者撮影)



図-3 大天守と小天守の連結式天守(筆者撮影)



図-4 外観復興天守と銅製の樋の復元(筆者撮影)